拝啓　あの日の俺

天照朱雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
拝啓　あの日の俺

【Ｎコード】
Ｎ９６９６Ｇ

【作者名】
天照朱雀

【あらすじ】
俺、遠野和哉はある朝なんの前触れもなく女になってしまった。なんで俺がこんなはめに・・・。俺の男ライフを返せっ！！そして謎の転校生。事態は急変する。俺が女でないといけないだって？頼む、勘弁してくれ。
かくして俺の日常は、拒否権なしに非日常へと放り込まれた。これから俺、どうなるんだろう・・・。

第1部　開幕

ピピピピピーーーーーーー
枕元に置いた携帯のアラームがけたたましい音を発している。毛布に顔を埋めたまま、手を伸ばして携帯を探す。春になったとはいってもまだ空気は俺の起床を妨げるのには充分過ぎるほどに冷たく張り詰めている。
ピッ。ようやく静かになった。なんて安心したのもつかの間、ディスプレイに表示された時計を見て俺は飛び起きた。
やばい、やばい。完全に寝過ごしてしまったようだ。昨日やっとテストが終わったばかりだからだろうか。さすがにテスト後に寝坊なんてありきたり過ぎてまずいよな。そう思い、即座に布団から抜け出すと、部屋のドアにかけてあるワイシャツと学ランをひっつかみ急いでそれを纏い始める。クローゼットの鏡を前に同時進行で鞄に教科書類も詰めていく。
そこで俺はようやくその変化に気がついた。
？何か違和感がある。特に胸のあたりが何か圧迫されているような・・・。ふと鏡の方をみるとそこに映っていたのは生まれてからずっと見てきた自分の姿ではなかった。肩くらいまで伸びた髪。うっすらと赤みを帯びた頬。そしてやや膨らんでいる胸元・・・。
？？なんだこれ？状況が把握できないぞ。目をこすって、深呼吸して、再び鏡をのぞき込んだ後、俺は絶叫した。家のなかにかん高い叫び声が響き渡った。

「ちょっと和哉どうしたの？叫び声なんか上げて・・・、遅刻するわｙ・・・・・」
叫び声を上げて心配そうに部屋にやってきたお袋も鏡の前で固まっている俺の姿を見て固まった。
「お、お袋・・・俺・・・」

「あ、ああ！和哉の彼女さんかしら！？やあねえ、もうあの子一言ぐらい言ってくれればいいのにねえ！」
そう言ってお袋はホホホと明らかに不自然な笑い声を上げた。いやいや待て待て。確かにこの状況では妥当な解釈だと思うが・・・違うだろ！！
「何いってんだよ！違うって！俺！俺だよ俺！和哉！」
「もう嫌ねえ。あんまりからかわないでちょうだい。和哉は男じゃないの～。あなたはどうみてもかわいらしい女の子じゃないの～」
かわいらしい女の子じゃないの～・・・かわいらしい女の子・・・
かわいらしい・・・その言葉が俺の心の中で何重にも広がった。嫌だー！！再び俺は叫んだ。
「どうしたんだ、一体！！朝から騒々しい！！和哉も早く準備をｓ・・・」
なかなか下りてこないお袋を心配してか、部屋にやってきた親父も、部屋で固まる俺とお袋を見て固まった・・・。
お、俺これからどうなるんだろう・・・。

決意

現在俺たち家族一同は親父の車にて、学校へと向かっているところだ。言葉にしがたい沈黙が重くのしかかってくる。結局、・・・まあ当然と言えば当然だが、今日は学校は休むことになった。
あの後、小1時間ほどかけて家族会議が行われた。困惑していたものの、とりあえず・・・とりあえず前向きに考えていくこととなった。そんな訳で、現在今後をどうするかについて、担任も含めて話し合おうということになり、学校に向かっているのだ。ずいぶんと楽観的なんて言ってくれるなよ？生まれてこの方ずっと男として過ごしてきたんだ。いきなりこれからは女としてがんばる！・・・なんて切り替えれるわけないだろ・・・。勘弁してくれ。

半ば、意識が飛びかけているような状態で外をボーっと眺めていると学校に着いた。すでに10時を過ぎたぐらいで授業もまったただ中な訳で、昇降口前の広場は閑散としている。
俺たちは車を降りた。ちなみに今の俺の格好は、当然女物の服なんて持っているはずもなく、かと言ってお袋の服を着るなんてこともしたくないので、下は紺のジーパンに上は白のパーカーという女性としてはいびつなものになっている。いかんいかん、再びげんなりなってしまいそうだ。落ち着け、落ち着け・・・。

すると、後ろから親父がなぜか満面の笑みを浮かべ、俺の肩をポン、と叩いてきた。

「・・・。」

まあ、一応励ましと取っておこう。

そろそろ行くか・・・。打開策のない今、いつまでも隠れている訳にもいかないしな。そう思い、俺は歩き始めた。

葛藤

「いや～、やっぱり、一日の最後はビールに限るよな！！」

そう言ってハッハッハ！とグラスを片手に笑い飛ばす親父。そしてその前の席で同じように

「や～ね、お父さんったら。ほどほどにしないと早死にしちゃうわよ～。ほら、和哉も言ってあげてよ～。」

と、手を口に当てて笑っているお袋。

「なにを！？まだまだこれからだぞ～！？」

・・・勘弁してくれ。明らかに会話が不自然じゃないか。いつもこんなテンションじゃないだろうに。あからさまに、気を使ってるのがバレバレだ。なんか、逆に意識してしまってちっともありがたくない。まあ、うれしくない訳じゃないけど・・・

現在俺たち家族はテーブルについて夕食の最中だ。食はあまり進まない。まあ、原因は明らかだ。先ほど風呂に入ろうとして、初めて直に、変わってしまった自分の姿を見てしまったからだ。別の状況でなら、喜ぶべきところなのかもしれないけれど、どういう訳か、微塵もそう言った感情はわかなかった。・・・いや、むしろ現実を突きつけられた感じがしてまたがっくりしてしまった。

「どうした、和哉？そんな顔して。あんまり気にするな？今の段階でなにも悩むことなんてないじゃないか？今日だってうまいこと話は決まっただろう。」

見かねたのか、親父が話しかけてきた。

「別に落ち込んでなんか・・・。」

そう、親父の言うように確かに今日はうまくいった。
昼間学校に担任と話しに行ったら、予想と裏腹に、すんなりと状況を飲み込んでくれたのだ。むしろ状況を楽しんでるようにも見えて、ちょっとムッとしたぐらいだ。
・・・とまあ、その結果であるが、俺（遠野和哉）は転校、そして、新しく今の女状態の俺は月曜から転入ということになった。まあ、妥当なところだと思う。
ついでに言えば、言い方は変だけれども、現在のクラスに入れてもらえるらしい。まあ、俺が抜けるせいで、一人減ってることになるから、当然と言えば当然の気もするけれど、やっぱり慣れた環境であるに越したことはないのでありがたい。

・・・一見問題はないように見えるな。とりあえず、俺が遠野和哉であるということだけは、クラスの連中にはばれたくないと思う。
（ばれると、なにかいろいろまずい状況になる気がする。）

転入まで、あと二日ある。その間にありとあらゆる準備をしなければならない。

はじまりのとき　1

「あんまり緊張しちゃダメよ？大丈夫、ふつうにしてればただの女の子にしか見えないわよ。」

目の前を教室の方に向かって進んでいる担任の若い女の先生が笑顔で励ましてくる。

「はぁ・・・。」

やっぱり、多少は慣れたとは言ったものの、人前にでるというのはなかなか抵抗があるものだ。

落ち着け～落ち着け～・・・。とりあえず深呼吸を2，3度繰り返してみる。

現在時刻8：25分。そして月曜日。まさに朝のSHR（ショートホームルーム）開始間際という時間であり、それと同時にいよいよ女となってしまった自分が公の場にでることになる初めての時である。

大丈夫、大丈夫・・・。準備は完璧なハズだ。・・・うん、多分問題ないだろう。ちょいとばかし、この休みのことを振り返ってみようと思う。

休日中にやったことその1，身の回りの品物を買いそろえること。

とりあえず、これは一番最初にやったことだと思う。日常生活でもさすがにいままで着ていたものを着続けるのには限界があるし、学校用品も、もちろん制服からカバンまで男女では異なっているから

な。

・・・けれどもここが一番疲れたところかもしれない。服を買いに近くの衣料量販店に出向いた時のことなんだが・・・

「ねえねえ、これなんてどう！？とってもかわいいじゃない！」

「いや・・・ちょっと派手すぎというか何というか・・・うん、それはない。」

「そう？あ、じゃあこっちのなんてどうかしら！！今はこういうのが流行ってるに違いないわよ！！」

「いや～・・・今度は露出度高すぎ。多分自分の姿に卒倒するから・・・うん、パス。」

というか違いないってなんだよ、違いないって。どう考えても自分の好みが9割がたじゃないか。

「じゃあ、こっちのほうを・・・」

・・・と言った具合になかなか決まらないのなんの。女性ものの服の善し悪しの基準なんていまいちわからないもんだから、お袋にもついてきてもらおうと思ったのが間違いだった。

自分がまだ完全に現実を受け入れられてなかったというのももちろんあるけれど、お袋のテンションの高いこと高いこと。大声を張り上げて話すもんだから、周りの注目を完全に引きつけてしまっていて、気が気でなかった。

その後も制服、日用品と見て回ったけれども、終始お袋のテンションに振り回されっぱなしだった。

あ、ちなみに制服姿の自分の姿に、若干グッと来てしまったのには

今でも後悔している。

はじまりのとき　2

はい、続いて休日中にやったこと、その2。名前決め。

実はと言うと、これに気づいたのは昨晩のことだった。いろいろな準備翻弄されて、一番身近で大切なものを忘れていた。

別に、名前を変える、とかそういう訳でもなく、言ってしまえばペンネーム？とあまり変わらない気もするので、時間もないし適当に決めてしまおうと軽く考えていたのだけれども、そんな甘い考えも見事に、もはやこの状況を楽しんでいるのではないか？と疑念を抱いてしまうくらいハイテンションで接してくる親父とお袋に一蹴されてしまった。

「なに言ってるんだ、和哉！名前と言うのはな・・・親から子に対する願いが込められた・・・大事な、・・・大事なものなんだぞ！？」

「そうよ、和哉。お父さんの言うとおりよ。そんななんでもいいだなんて、名前に対する冒涜としか言いようがないわよ！？」

そんな感じのことを俺の意見もむなしく数十分延々と語られた。・・・うん、もうわかったから、心配してるのか、おちょくってるのかはっきりしてくれないか。おい、そこの二人、言ってることとは裏腹に目が笑ってるんだよ！、目が！！

・・・そんなこんなで結局名前について話し合うことになった。

「え～・・・、じゃあ意見のある方はどうぞ・・・。」

落ちるところまで落ちた、いや、落とされたテンションでなんとか話を進めていく俺。

「宇宙と書いて、「そら」か、百合と書いて、「リリィ」なんてどうだろうか？」

そんな発言をするのは親父。・・・おかしいな、俺の知ってる親父はこんなことはこんなことをいいやがるハズはないはずなんだが・・・。ちょっと待て。なんだその今の若い親が安直に考えそうな名前は？なにか？もしかして、俺が女の子だったらこんな名前を付けられていたということなのか？

「・・・個人的に無性に受け付けないので却下の方向で。」

あと親父は俺の知っている親父に戻ってください。

「そんなのダメよねぇ。私は聖子か良美なんて憧れるわぁ・・・。」

今度はお袋。いや、憧れなんて聞いてないんだけれども・・・。ていうか古いな。何か時代を感じざるを得なかった。

「・・・そんな時代に逆行した名前は無理です・・・。」

はじまりのとき3に続く

はじまりのとき　3

あ～、やっぱりこうなるんだよな。まあ、だいたい想像はついてたよ。しかし、ないものだろうか。こう、だれもが納得して、うなずけるようなそれっぽい名前は。
もう一度冷静になって考えてみる。やっぱりこういうのは自分で考えなければ納得できないような気がする。

その時だった。フッといきなり頭にひとつの名前が浮かんだ。
・・・？何か変な感じだ。妙に懐かしいようなこそばゆいようなそんな感じがした。そしてその名前しかあり得ない、なぜだかわからないけれど、自然とそう思えた。

「・・・わかった。」　俺はいつの間にかつぶやいていた。

「わかったって？おお！やっと納得のいく名前でも思いついたのか！」

俺の声につられて二人がこちらの方を向いた。

「もう、お母さんたちにはいい名前考えられないから、和哉、あんたが自分で決めちゃいなさい。」

お袋・・・。
えー、じゃあ改めて自分が女である間の仮の名ではあるけれども、割と悩んでやっとこさ考えついた名前を発表したいと思う。

「俺の名前は今から彩芽(あやめ)だ！！理由はわからん！！けれどこれしか

ないんだ！！」

言ってしまった。もう、後戻りはできないな。しばらくの間この名前とつきあっていくことになると思う。

「彩芽か・・・。うん、いい名前じゃないか。なかなか、かわいいと思うぞ！」

「そうね、いいと思うわ。でもいい？和哉。これからあんたは彩芽という名前で過ごすことになるけれど、私たちの息子、和哉はいつでもちゃんといることを忘れないでね。」

親父・・・お袋・・・。

・・・こうして俺は彩芽という名前を手にすることとなった。（ちなみに名字は、遠野をちょいといじって、宮野で行こうという話になっている。）

「彩芽ちゃん？大丈夫？」

先生が不安げな表情でこちらを見ている。いっきに現実まで引き戻された。すでに教室の扉の前、というところまで来ていた。いよいよみたいだ。

「大丈夫です。もう、準備はできてますから。」

それを聞くと先生は、形の良い目を細めてにっこりと笑った。・・・大丈夫。うまくやってやろうじゃないか。

対面　1

まず始めに先生が教室の中に入っていった。
俺はというと、ここで待っててね、という先生の言葉により、ドアの横で待機している状態だ。おそらく、諸々の連絡、・・・俺、遠野和哉が転校したこととかを伝えるのだろう。ドアに寄りかかって、中の様子を少しうかがってみる。

「～ということで、ちゃんと提出しましょうね～。・・・それから皆さんに今日は残念なお知らせと、うれしいお知らせがあります。まず、突然のことなのですが、遠野和哉君が、家庭の事情により、急遽転校ということになりました・・・。」

ちょうど、話題が俺の話に移ったところだった。

先生の突然の発言に教室の中は、驚きの声でざわついているようだった。

「なんだよそれ！？俺は和哉から、なんもそんなことは聞いてねえぞ！？」

ガタッとイスの音がして誰かが叫んだ。この声は・・・聡（さとし）だ。中学から現在まで同じクラスの数少ない存在だ。親友と呼ぶには十分に足る仲だと思う。

「そうですよ、和哉は・・・和哉は何も言ってなかったんですか？」

この声は悠人（ゆうと）だろう。聡と同様に、いつもだいたい行動をともにしていた友人だ。聡・・・悠人・・・、俺はここにいるぜ？しかし、

これからのことを考えると、そのことは話す訳にはいかないのだ。仲間からの心配と、それに答えられない感情で、胸に自然とあついものがこみ上げてくる。

「和哉くんは、急な転校でみんなに最後の別れもできないことを、とても残念に思っていたわ・・・。」

そう言った先生の言葉で、教室は一瞬静まりかえった気がした。

うおおおおお！！これはやばい。なんだよ？まさかこんなお涙ちょうだい、な展開になるとは正直あまり考えてなかったので、激しく心を揺さぶられる。ここで泣いてしまうと、もしかしたら、表情から勘ぐられてしまうかもしれないのだ。わかっている、わかっているけれどもなかなかに耐え難いものがあった。

「きっとまた会える日が近いうちにくるわよ。だから、今はその日を待っていましょう？」

「・・・」

席を引いて座る音が聞こえた。どうやら、先生がうまく場をまとめてくれたようだ。

「・・・じゃあ、今度はいい方の話をするわね！このクラスになんと転入生が来ています！！」

エエッ！という歓声とともに再び教室がざわついている。

「そしてその転入生は女の子です！！」

その先生の追加の一言で、教室の女子からは新しい友人への期待からか、明るい歓声が、男子からは・・・なにか邪な雰囲気漂う歓声が上がっているようだ。

「まじでか！？やっべ～どうしよう、俺なんも準備してねえわ～！！」

・・・そんな発言の声の主は、先ほどまで俺との別れを悲しんでくれていたはずの聡だった。・・・おいおい、いくらなんでも切り替え速すぎだろ。ていうか準備ってなんだ、準備って。お前は前もって来るってわかってたら何をやらかすつもりだったと言うんだ？くっそ～、あのヤロウ、今の自分の行動を覚えておけよ？

そんなこんなで軽く傷心しつつ、聡への報復を考えながら、またそれと同時にやたらな盛り上がりの中、かなりハードルが高くなった教室に入ることに不安を感じていると、中にいる先生から入るようにとの要請があった。

心なしか、すでに、疲れを感じる。深呼吸で一度気持ちを落ち着けてみる。・・・よし行こうか。何度も練習した一番自然だと思えた表情を作ってみる。

そして、一気に俺はドアを開いて中に入った。

対面　1（後書き）

この度は、私が書いている小説を読んでいただき、本当にありがとうございます。そしてその中に、おもしろい、と思ってくださったり、読んで良かったと思ってくださる方があれば、なおうれしいです。

さて、まずここまで、書いて来た訳ですけれど、続けて読んでくださっている方、そうでない方にも、更新が不定期になってしまっていることをお詫びしたいと思います。原因は現在の私の生活パターンの乱れにあるのですけれども、そこで、最低でも週1での更新を心がけて行きたいと思います。

長くなって申し訳ありません。あと、感想等いただけましたら、非常にありがたいことこの上ないです！暇なときにでも、もしよければお願いします。それでは、また。

対面　2

ガラッ。

心なしかドアがいつもより大きな音を立てて開いた気がした。ああ・・・、すでになんとなく視線を感じる。

とりあえず、平静を装いつつ、ぎこちなく先生の隣まで歩いていって、前方に向き直った。そこには、・・・まあ当然ながらそこには見慣れたクラスメイトたちの姿があった。いつもと違う点と言えば、皆の俺を見る目がいつもと違っているくらいだろうか。とはいっても、それも当然のことだろうな。なんせ、みんなは俺と俺・・・ああ、ややこしいな。前の俺と現在の俺が同一人物なんて、ふつうわかるはずないしな。第一に、性別が違う。そして自分で言うのもなんだが、顔の構造もまるで違っている。そりゃあ、男と女なんだから、違っていて当然だろう。下手に、「あれ・・・なんか和哉に似てる・・・。」なんて言われた日には、たまったもんじゃない。

「はい、じゃあ宮野さん、自己紹介してもらえるかしら？」

先生はそういうと、一歩下がって場を譲ってきた。間際の片目をつむりながら（ウインクか？）の親指をグッと突き出したポーズをとっている。まあ、そんなことはどうでもいい。再び深呼吸をしてみる。（なにやら、この女状態になってから深呼吸が癖になってしまっているような気がする。）

「え～、み、宮野彩芽です。まだこっちに来て長くないんで、慣れないことばかりなんですけど、早くみんなと仲良くなりたいです。どうぞよろしく。」

・・・はっ！！言ってから初めて気づいた。全くもって女子らしく（自分なりに）話すことを忘れていた。あああああ・・・・一人で心の中で自己嫌悪に陥っていたけれども、幸い誰もそれを気にしているクラスメイトはいないようだった。先生が拍手をすると、それにとられるように、あちこちから拍手が起きる。そんな光景を見て少しばかし安心した俺だった。

そんなこんなで、なんとか朝のホームルールは終了した。一時間目の授業まで少し時間があるけれども、いきなり何かできる状況でもないので、机に突っ伏していると、誰かが話しかけてきた。

「み～や～のさんっ！！」

呼ばれたのが自分の名字だとコンマ数秒してから気づいて、勢いよく顔を上げた。

目に入ったのは、まぶしいばかりの笑顔。そこにいたのは、薫（かおる）だった。こいつは雨風（あまかせ）薫。いわゆる幼なじみと言うやつだ。家が近所のせいもあり、小さい頃から、一緒に遊んだりしていて、異性というよりは、兄弟と言った方がしっくりくるような関係だったやつだ。・・・というかこれはよく考えればまずくないか？こいつに俺の家から、今の俺、つまり宮野彩芽がでてきたりするのを見られたりすると、ものすごーくまずいことになる気がする。

「な、何？雨風さん。」

なんだよ、薫。と言ってしまいそうになるのをグッとこらえてそう言った。するとなぜか薫はパッと一層笑顔を浮かべた。

「えっ！？宮野さん、もう私の名前覚えてくれたの！？いや～うれしいな～。宮野さん！！わかんないこととかあったら、なんでも遠慮なく聞いてねっ！！」

！！やばっ。確かに転校初日のやつがクラスメイトの名前なんて知っている訳ないじゃないか。

「せ、先生から名簿見せてもらってたから、ね。割と人の名前覚えるの得意なんだよね。」

「あっ、なるほどね～。でもなんで名前だけで私だってわかったの？宮野さんすごいね！！」

あああああ。馬鹿か俺は。ますます、不自然なことになってるじゃないか。まさに墓穴を掘るってやつだ。・・・まあ、薫はこのテンションの高さと、笑顔から、ただ純粋に驚いてるだけみたいだから、一応問題ないだろう。

対面　3

それからも、俺は対応にあたふたしながら、薫はそんなことお構いなし、といった様子で楽しそうにの会話を続けていると、そんな様子を見てたのか、再び誰かが話に入ってきた。

「おいおい、雨風。そんなに宮野さんをいじめるなよ。宮野さん困ってるじゃんか。」

声のした方を見てみると、・・・はいはい、やっぱり例の聡君じゃないですか。まあ、だいたいそんな感じはしてたけどさ。

「なによ聡。だ～れが宮野さんをいじめてるですって～？今宮野さんといい感じなんだから、邪魔しないでよね。」

いや、それはおかしいだろ。俺はお前と普通とも言い難い会話だけしか、した覚えはないぞ。

「かわってね～な、雨風は。こういうのはデリケートな問題なんだよ。転入したての頃ってのは、何かと不安で心細いもんで、他人からの発言一つにも敏感になってて、時には深ーく深ーくｋ・・・」

「はいはい・・・。まったくさぁ、転校なんてしたこそないのに、知ったようなことをそんなにペラペラと言えるわよね～。ホントやれやれってさ。」

聡の発言に薫はあきれたような表情をしながら、肩をすくめてみせた。

まあ、確かに聡も一理あるな。まあ、俺の状況の場合、転校の不安

ってのよりも、自分のことがばれてしまうのが怖い訳なのだが。

「フッ。俺には分かるさ。なんだか知らんのだが、俺は宮野さんと会ったときどうしても初対面とは思えない感覚を感じたのさ。そう、これこそまさに運命に違いない！！と言うわけで宮野さん！！、俺とつきあっｔ・・・」

うげ・・・。なんかえらいことを聞いてしまった気がする。しかもそれがこいつというのだから、何か無性に嫌な感じだ。

バシッ！！

全部言い切る前に、隣にいた悠人と薫に聡は頭を叩かれた。

「いきなり何告白してんのよ！！ほんっとバカなんだから！！」

「そうだよ、聡。いくらなんでも唐突過ぎだって。物事っていうのはもっと順を追っていくものだよ？」

「いいじゃねえか。何事も第一印象だっての。・・・いやそれにしても痛い・・・。」

聡は頭をさすりながら抵抗している。けれど今はそんなことはどうでもいい。それよりも、俺はその時、さっきの聡の発言が気になっていた。

対面　4

聡はさっき、確かに「初めてあった気がしなかった。」と言った。
まあ、普通に考えれば、よくある決まり文句のようにも聞こえるけれども、俺がそう感じなかった理由は別のところにある。それは薫だ。
実は、聡と悠人がやってくる前に薫と話していたとき、薫からも、ほとんど同じようなことを言われたのだ。

「なんかさ～、私、こういうこと言うのもベタかなって思うんだけどさ、ホントに宮野さんを見たとき、ぜんっぜん初対面って感じがしなかったんだよね～。・・・」

的な感じだったと思う。そのときは、こいつは何を言ってるんだ、ぐらいにしか思ってなかったのだけれども、聡の言葉を聞いた今では、そうは思はない。なぜなら、確かに今の俺の姿は以前からは微塵も想像がつかないくらいの別物なわけだけれども、実際に俺自身はこいつらと先週まで過ごしていた訳なのだから。
薫や聡が何らかの、・・・よく分からないが第六感的な何か未知のパワーにより以前の俺の存在を感じ取ってくれているのかもしれない。なにやら電波なことを言っているように聞こえるかもしれないが、こっちは大まじめだ。もしそれが本当なのなら、現在の自分が全く以前の自分と切り離されているわけではないのだから。それならばきっと元の自分の姿に戻る方法もなくはないはずだろう。

「そういやさ～、宮野さん。遠野和哉ってやつを知ってたりしない？」

・・・はぁ！？突然聡が話しかけてきた。考えごとをしていたので、話の流れはまったく途中から覚えてないけれど、なにがどう転んだら、こんな核心じみた質問につながるって言うんだ。

「え、え！？い、いや～まったくわからないかな。アハハ・・・。だ、誰それ？」

はいはい、もちろん動揺しまくりの俺はまるっきり不自然な答え方をしてしまった。

「いやさ～、実は宮野さんが転入してくる前にさ、クラスにそんなやつがいたんだけどさ～、割とよくつるんでたってのに、何のあいさつもなしにいきなり転校しちまったんだよ。ちょうどまさに宮野さんと、入れ替わり立ち替わりみたいな時期にさ。ほんっとなにしてんだろうな。次あったら絶対問い詰めてやるっつの。」

「へ、へ～そうなんだ。それは一度会ってみたかったね。」

ほっとけよ。俺だっていきなりこんなことになるなんて思いもよらなかったんだから、別れの挨拶なんてできるわけないだろ。それにしても、確かに交代での転入と転校というのは、少し不自然かもしれない。まさかいきなりこんな危うい状況になるとは思いもよらなかった。もっといろいろ考えておくべきだったかもしれない・・・。

「だよね～。ホントに和哉どこ行っちゃったんだろ・・・。」

薫がため息混じりにそう言った。

「大丈夫だって。そんなに心配しなくても、多分和哉だってなんも

なしに僕たちと別れるなんて望んでなかったはずだし、きっとまたなんらかの形で再会できるって。少なくとも僕はそう信じるよ。」

悠人・・・、お前はなんていいやつなんだ。ああ、いつか元に戻れたら、真っ先にお前らに会いに行くことを今この場で宣言するぞ。

（心の中で。）

「あったりまえじゃない！！和哉のやつ、絶っ対にこのままじゃすまさないんだから！！」

ええええええ・・・・。なんでそうなる。

・・・まあ、何はともあれ、そんな感じで俺の新しい日常は幕を開いた。現段階では・・・、まあ不安しかないんだけれども、今はそんなことはあまり考えたくない。大丈夫さ。少しずつでも、何か元に戻るための手がかり的なものを探して行きたいと思う。

第一章おわり　第2章に続きます。

第2部　転機

季節はすっかり春だ。寒さなんてものは、もはや懐かしいくらい前のことのように思えるくらい暖かく、いい具合にたびたび眠気を誘ってくる。まあ、そんなたびになんとかして自分を授業という現実世界に引き止めようと悪戦苦闘しなければならないわけなのだが。そして今日も、朝から当然のことのように空は真っ青で、学校へと向かう足を憂鬱にさせる。

「あつい・・・。」

自然とそうつぶやいてしまう。今さらではあるが、どうしてこうも女子の制服というものはつくりが複雑なんだ。着るのに時間がかかる上に、何より暑い。そう暑いんだ。ああ、白シャツが恋しい・・・。

そう忘れもしない、なぜかいきなり俺の男としての人生にピリオドを打たれてしまったあの日からもう1ヶ月ほども経ってしまっているのだ。最初のころは、きっと元に戻れるさ、などという今思えば、ほほえましくも思えるくらいの希望があって、あれこれ試したりしたものだけれど、結局そんな行為もむなしく、現在も俺は女子としての生活を余儀なくされている。

こうも長く過ごしていると、もはやなんだか慣れきってしまって、笑えないことに大抵のことはお手のものになってしまった。ああ・・・、本当に戻れるんだろうか・・・。最近では、実はこんなことは世界中で日常茶飯事のように起きていて、他人に話しても、ああ、お前もか。それで？みたいに流されてしまうんじゃないか、なんてことまで考え始めてしまう始末だ。

そんなことを考えながら歩いていると、あっという間に学校に着いた。まあ、もともと家から近いという理由がほぼメインで選んだ公立高校だから当然といえば当然のことなわけだが。

ああ、今日もまたいつもと変わらない一日が始まる。そんな風に考えていたけれども、この日はいつもと少し違っていた。

このクラスに転校生がやってきた。

転機　2

「おっはよー！！彩芽っ！」

俺が眠たそうな顔で教室に入ったと同時に、もう自分の名前となって久しいその名前を呼んだのは、薫だった。

「あ、おはよー。」

とりあえず笑顔をつくってそう答えた。まったく、どうしてこう朝からハイテンションでいられるっていうんだ。１パーセントずつくらい皆に配ってまわれば、そりゃあ、他クラスから軽く浮くくらいの活気あるクラスが誕生することだろう。

そう思ったところでふと違和感を感じた。おかしい、なぜか今日はいつもと違い妙にクラス全体が騒がしい。んー、いやなんというか少し空気の色が違う。

「あのさぁ、今日って何かあったっけ？」

数秒ほど今日の日程の中で、答えとしてめぼしいものを考えたけれども、何も浮かばなかったので薫に聞いてみた。

「そうなんだよ！彩芽は男子と女子どっちがいいの～？」

・・・いや、もうハイテンションについてはそのままで構いませんので、せめて質問には正しい返答をしてほしいんですが。男子と女子だ？一体、何についての質問かも知らないってのになんと答えろというんだ。んー、自分がって言ったら今はとりあえずや

っぱり男に戻りたいぞ。

「ちょっと待った、待った。ゴメン、それじゃあ話が全く見えないよ。」

「あ、ゴメンゴメン！ちょっと浮かれてたねー。そうそう、なんと今日うちのクラスに転校生が来るのよ！？ちょうどそのことをみんなで話してたんだ～。」

転校生だって？そりゃあ、また何か中途半端な時期だな。親の都合ってところだろうか。いや、訳ありの問題持ちってこともなくはないはずだ。どちらにしても確かに気になるな。それに、変な形とはいえ、一応転校生気分を経験している訳なので、少し親近感もわいてくる。

転機　3

そんなこんなであれこれしていると、やがてチャイムが鳴り、先生がやってきた。いつもはだいたい先生が席に着くようながしてから皆が座りだすのだが、今日はすでに皆が自分の席についている。まあ、早く転校生がどんなヤツなのか見てみたいってところだろう。ったく、ホントわかり易いのなんのってな。
まあ、かく言う俺も人のことは言えないわけだが。

「はいはい、今日はいいお知らせがあります。まあ、すでに皆さん知っているようですが・・・。このクラスに新しい仲間が増えます！」

待ってましたと言わんばかりに教室がざわめいた。
皆の妙にソワソワした様子を察してか、いつもより巻いて先生は話を進めているようだった。

「それじゃあ入ってきてもらえる？」

先生がそう扉のほうへ言った。いよいよ転校生との対面のようだ。
まあとりあえず、緊張の一瞬ではないだろうか。

扉を開いて入ってきた人物を見て、かすかに女子の中から歓声が上がった。転校生は男子だった。

割と細身で身長は中ほど。学ランがよく似合い、顔は人懐っこそうな感じだ。パッと見た感じなぜかカステラとかミルフィーユとかそういった類の食べ物が頭に浮かんだ。意味がわからん。普通はせめ

て動物とかだろ。ああ、これは女子にもてそうな感じだ。俺だって今じゃこんな有様ではあるけれども、男子であるので、クラスの男子らの心なしか面白くなさげな表情にも同意したいところだ。

「関西の方から来ました、士和馬（つかさ）っていうものです。はやくなじんでいきたいと思ってますんで、皆さんどうぞよろしく。」

士　和馬と名乗ったそいつは終始、きさくな笑顔でそう話した。それがまた妙に板についていてけして悪い感じはしない。すぐに教室に拍手の音がわいた。（比率でいったら、男子3割女子7割ってところだったわけだが）

「それじゃあ士君。そうね・・・とりあえずあの窓際後ろから2列目の2番目の席を使ってくれる？ちょうど今日そこ休みだから。まだ席が準備できてないのよね。」

ひと段落したところで、先生が苦笑いしながらそう言った。
後ろから2列目の2番目・・・って隣の席じゃないか。なんという偶然。ていうか先生。席ぐらい事前に用意しておくべきでは？まあ、そんなときたま抜けてるところが人気のポイントなのかもしれないけれどさ。

それにハイ。とこれまた笑顔で答えると士がこっちに向かって歩いてきて、隣の席に座った。クラスの女子の数名がこっちを見て微妙に恨めしげな表情をしている。まあ確かに普通の女子だったらこれはそれなりにおいしい機会かもしれないが、残念ながら俺は普通ではないので別にこれといった感情は当然わかない。なぜか少し損な気分だ。まあ、友好的な態度でいることに悪い点はないだろう。

「よろしく、士君。私は宮野彩芽です。わからないことがあったら

何でも聞いていいよ。」

そう思い俺は、きわめてまとも、かつ明るくそう話かけた。しかし返ってきた答えは微塵も想像していなかったものだった。

「その様子だともうその状態にも慣れたようですね。お待ちしていましたよ、和哉君。」

俺は一瞬固まった。・・・は？おいおい今こいつは何を言いやがった・・・？

始まる連鎖　1

なんなんだこいつは一体・・・。どうして本当の俺のことについて知っているんだ？そのことを知っているのは、俺とその家族２人に、先生ぐらいのわずか数名だけのはずだ。身近なやつらにも、けして気づかれることのないようにここまでやってきたというのに、なんで転校してきたばっかりのこいつがそんなことを・・・？

「いや～、ほんと大変だったんですよ？君が目覚めるのがあんまり急だったものだから僕は・・・」

！　ヤバイ。こいつは何を大声でしゃべりだすつもりだ。ただでさえ周囲の関心がお前に集まっているというのに。

「ちょ、ちょっといいかな、士くん。こっちに！！」

２つほどの意味で身の危険を感じた俺は、半ば強引に士の話をさえぎり、かつできるだけ目立たないように気をつけながら、士を引っ張って教室から飛び出した。

「宮野さん！・・・、ってあれ？なあ雨風。宮野さんってどこいったんだ？」

「あれ、今までいたのになぁ？彩芽どこ行っちゃったんだろ。」

「宮野さんならさっき、士君をひっぱりながらすごい勢いで走ってでてったけど？」

聡の問いかけに、そう悠人が答えた。

「何だって！？まさか宮野さん・・・もう士に・・・？くそっ！士

和馬許すまじ！！宮野さんは渡さん　ぞ！」
「あの、聡・・・。別にそうと決まったわけじゃ・・・。それに宮野さんは聡の何ものでもないしさ。」
「あー悠人、いいのよ。ほっとけば。昔っから聡はこういうヤツなんだから。」

一人盛り上がる聡を悠人がなだめているところを薫があきれたような仕草をしながら止めた。

その頃俺はというと、第2棟へと続く通路への階段の下のところまで来ていた。ここなら人目にもつかないし、とりあえず安全だろう。

「ちょっとちょっと、痛いですって和哉くん。そんなに急がなくても、ちゃんとついて行きますって。」

士は苦笑いしながらそう言った。言われてみれば、まだ士の学ランを俺は掴んだままだった。とりあえず離して、俺は深呼吸して息を整えた。

「聞きたいことは山ほどあるけど、とりあえずここでその呼び方はやめてくれ。」

俺がそう言うと、士はなぜかキョトンとした表情を見せた。

「なぜです？君は遠野　和哉くん本人ですよね？」
「なぜってお前。俺の今の状態見りゃ分かるだろ？お前がなにを知ってるのか知らんが、今の俺は宮野彩芽っていうただのどこにでもいる女子なんだよ。俺は転校したんだ。そんなやつの名前で呼ばれてたら、明らかに不自然だろうよ。」

俺がそう言うと今度は士は不思議そうな顔をした。

「そうだったんですか・・・。でもなぜそんな回りくどいことをするんです？君の力を持ってすれば、状態置換なんて容易いことではないのですか？」

・・・は？状態なんだって？力ってなんのことだ？

「すまん。言ってることがまったく理解できない。もう少し分かりやすく話して欲しいんだけど・・・。とりあえずお前はなんなんだ？そしてなんで俺のことを知っている。」

「さっきから聞いていれば・・・君、本当に和哉くんですか？それともただ僕をからかってるんですか？」

明らかに疑いをもった目で士はそう言った。

「別にふざけちゃいないさ。それに確かに俺は遠野和哉だ。そこだけは誰にも否定させやしないぞ。だけどお前のことなんてまったく知らないし、お前が言ってることはもっと分からない。」

当然だろ。転校してきたばかりのやつのことなんて知らないのが普通だし、過去に関西方面に行ったことなんて微塵も記憶にない。誰に聞いたってまともなのは俺の方だって答えるだろーよ。

「だとするとホントにおかしなことですよ。まったく聞かされてたことと違うし・・・。」

だからそのこっちに分からない話はやめてくれ。誰から何がおもしろくて俺の話なんて聞くって言うんだ。

「それに僕は君に呼ばれてここに来たんですよ？」

・・・は？士を呼んだ？・・・俺が？

俺はますます意味が分からなくなり聞いたことを後悔した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9696g/

拝啓　あの日の俺

2010年10月11日02時49分発行